

第3節 東西トレンチの発掘調査と出土遺物

1 はじめに

中央トレンチから東は貝層がどのように広がっているのか、また遺物の出土にどのような傾向があるのか探るべく、G-20～24区に幅2m、長さ14mのトレンチを設定して発掘した。中央トレンチと東西トレンチの間である20G区には2×2mのトレンチをいれた。

その結果、貝層は22区西端にかかるあたりで途切れていることがわかったが、23～24区にもスポット状に分布していることもおさえることができた。特筆すべきは23区の南端に早稲田大学のトレンチが検出されたことであり、H区に調査範囲を広げて全体像をつかんだ。

出土土器の傾向は他のトレンチと大きな差はない。

2 20G区の調査と出土土器

(1) 土層堆積状況 (図161)

20Gc区の南半は大きく攪乱を受けている。1層の耕作土の下に暗褐色土の2層が20～40cmの厚さで堆積する。それを除去すると貝層が現れる。貝層は西半は褐色土を主体として貝をまじえる混貝土層であり、東半は貝に黒色土をまじえる混土貝層である。混土貝層は攪乱を受けていないが、混貝土層は攪乱を受けた可能性がある。混土貝層の表面は、東から西に向かい、下がって傾斜している。貝層の最も高いところは海拔標高約30.80mである。遺構は確認されていない。

(2) 遺物出土状況と堆積の時期 (図161)

混土貝層の表面中央で土器の破片が集中して検出された。これらの土器の型式は千網式で占められており、貝層の時期は千網式期であろう。

(3) 土器 (図162・2661～2674)

第Ⅷ群土器 (2663)

2類 口縁端部に粘土貼り付けをもつ鉢。

2期の安行3b式ないし姥山Ⅱ式。

第Ⅸ群土器 (2661・2662)

3類 太い沈線により区画された磨消縄文をもつ。前浦Ⅱ式。

表37 東西トレンチ20G区出土土器の層位

番号	層位	2663	耕作土	2666	耕作土	2669	耕作土	2672	耕作土
2661	耕作土	2664	貝層直上	2667	耕作土	2670	貝層直上	2673	耕作土
2662	耕作土	2665	貝層直上	2668	耕作土	2671	貝層直上	2674	耕作土

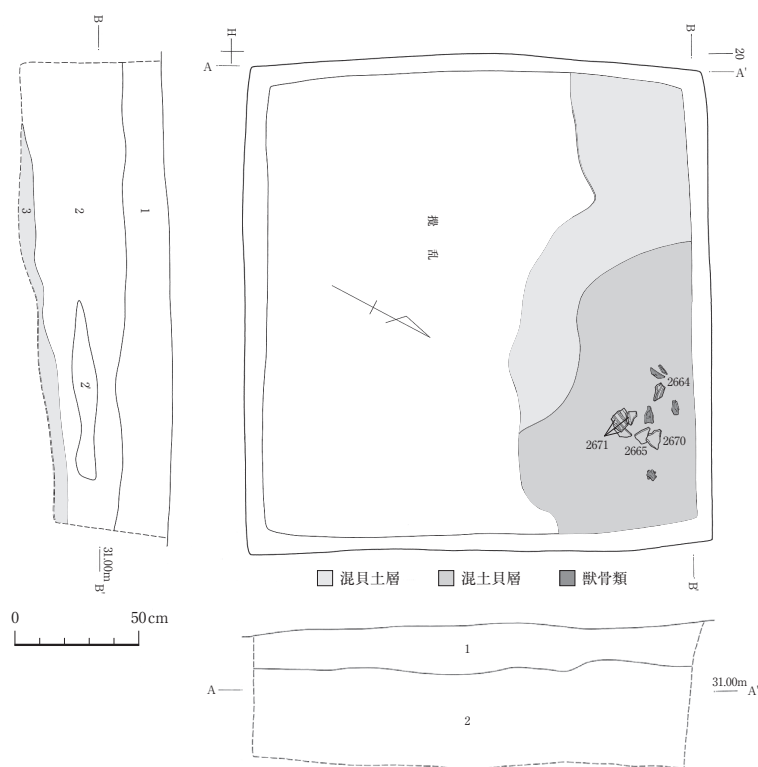


図 161 東西トレンチ 20 G区

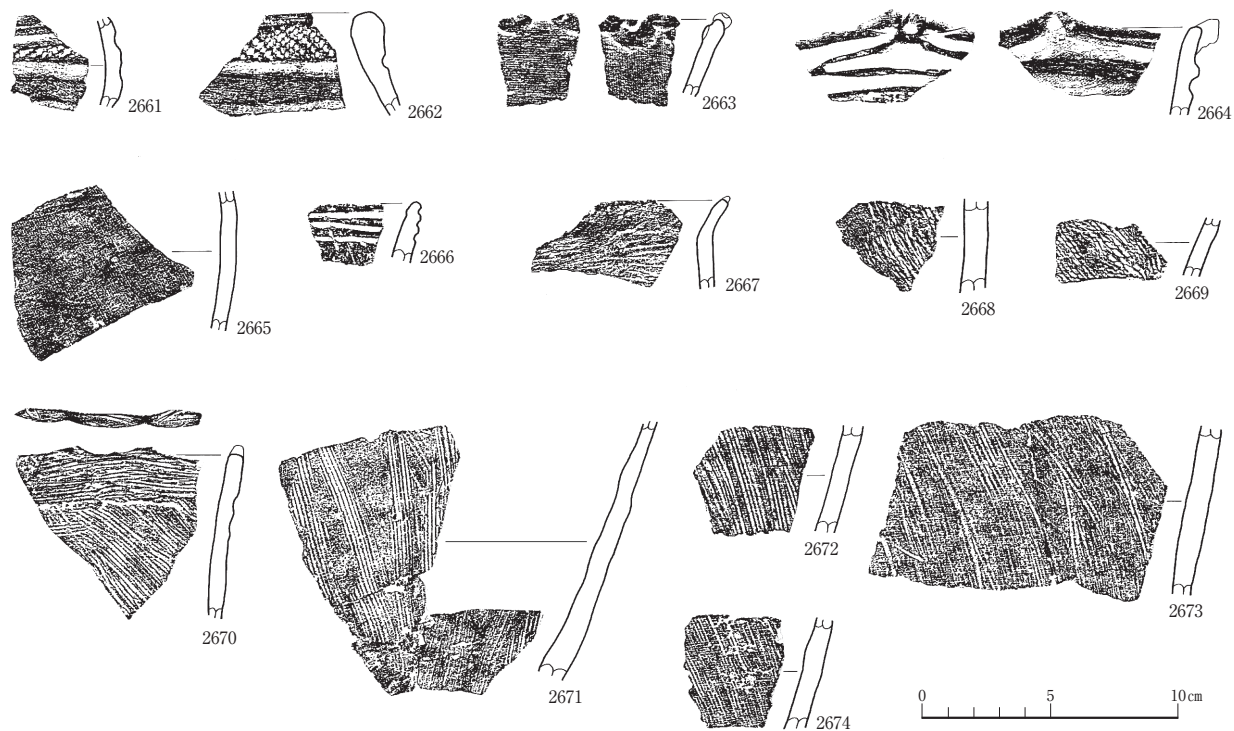


図 162 東西トレンチ 20 G区出土土器

第X群土器（2664～2674）

3類（2664） 浮線網状文の深鉢。口縁部に浮線網状文をもつ。小波状口縁のボタン状突起に収束するハンガー状の網状文を単位とし、交互にくりかえす。交点は2線に分岐する。内面には太い凹線による文様があり、波頂部は三角形状にえぐられる。

4類 なし。

5類（2666） 沈線文の鉢。口縁に3条の沈線を施す。

6類 なし。

7類（2668・2669） 撚糸文の深鉢。

8類（2667・2670～2674） 細密条痕の深鉢。これらの細密条痕は、いずれも密で細かく整っている。2667は口縁を短い無文帯とし体部に横方向の細密条痕を加える。2670は口縁に折り返し状の段をもち、横方向の、体部は斜め方向の細密条痕を施す。口縁は浅い指などによって小波状をなし、端部にも細密条痕が加えられている。

千網式。中部高地地方では離山式に並行する浮線網状文第2段階の資料である。細密条痕が細かく整ったものばかりであるのも、細密条痕でも古い傾向を示している。

20G区出土土器のまとめ 20G区出土土器は、晩期中葉～晩期終末の土器で構成され、晩期終末の千網式が主体をなす。

3 21G区の調査と出土土器

（1）土層堆積状況（図163）

耕作土の下に2層があり、その下に貝層がある。貝は中くらいの大きさのヤマトシジミを主体とする。c区は全面を破碎貝層が薄く覆っており、部分的にその下の混土貝層が露出している。d区はc区の混土貝層が続いているが、西北隅や、南壁沿いにまとまっており、あとは中央付近にブロック状に残っているだけで、そのほかの場所では貝層下の褐色土層が露出している。混土貝層の表面は、c区で海拔標高31.14m、d区で31.1mである。20～24G区の貝層は、c区を頂点として東西に傾斜して堆積している。遺構は確認されていない。

（2）遺物出土状況と堆積の時期（図163）

褐色土上面から貝層上面には、土器や獣骨が雑然と堆積している。これらの土器の型式は千網式・荒海式を主体とするが、晩期前半の土器や加曽利B式、堀之内1式を含んでおり、I-2・3区貝層下褐色土層上面と同じ状況を呈している。貝層の堆積は縄文晩期終末と考えられるが、褐色土層はそれ以前の堆積であり、土器が貝層にまきあがっているのだろう。

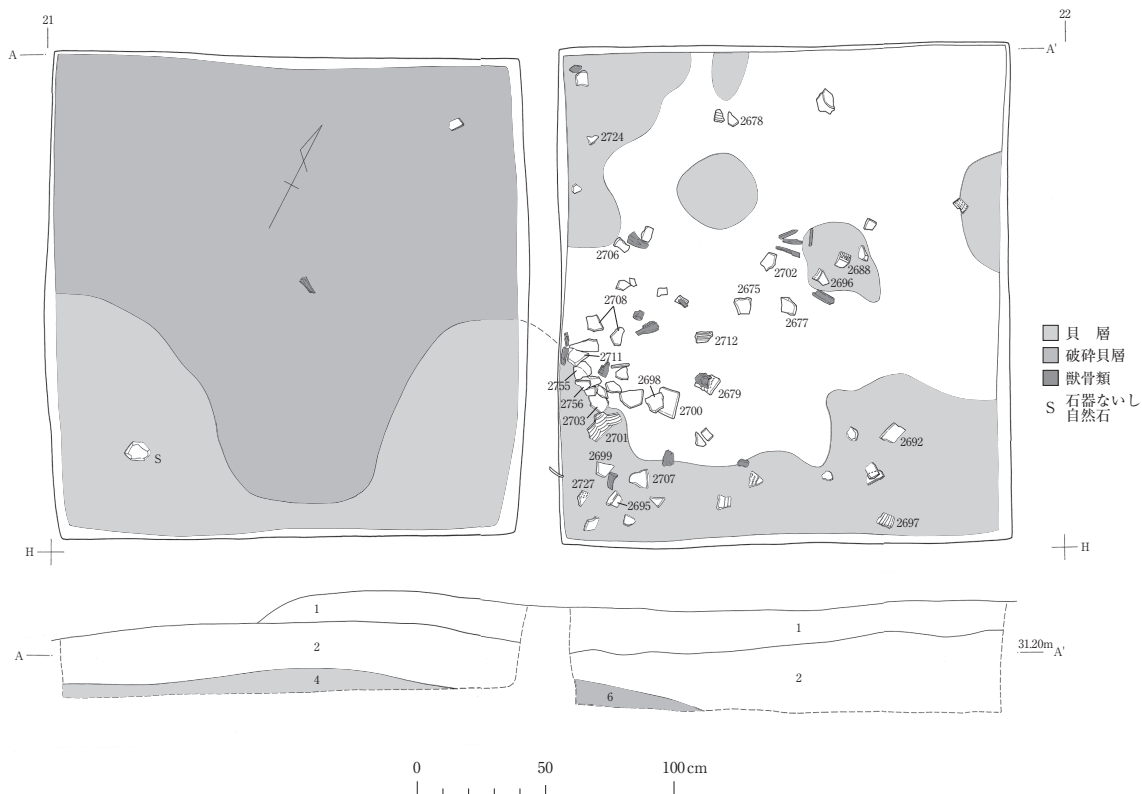


図 163 東西トレンチ 21 G 区

(3) 土器 (図 164~165 - 2675~2758)

第Ⅴ群土器 (2675・2676)

2 類 縄文地文に沈線文を描く深鉢。堀之内 1 式。

第Ⅵ群土器 (2677~2684)

1 類 (2677) バケツ形の深鉢。帯縄文をもつ。

2 類 (2678) 口縁がやや内湾する鉢。

3~13 類 なし。

14 類 (2680・2681・2683) 紐線文土器。2681・2683 は縄文地文に粗い条線が施される c 種。2681 の条線は半截竹管による。

1・2 類は加曽利 B1 式。14 類 c 種は加曽利 B1 式ないし B2 式。

第Ⅶ群土器 (2684)

3 類 隆起帯縄文の深鉢。2255 と同じ平縁の a 種か。

安行 1 式。

第Ⅷ群土器 (2685~2703)

1 類 (2685~2688) 扁平な磨消縄文の土器。2685・2687 は帯縄文と磨消縄文の間に三叉文をもつ。

2 類 (2689・2690・2692・2683) 扁平な磨消縄文の土器で、三叉文をもたない一群。2689 は平縁の鉢。頸部が屈曲する。口縁部に弧状の磨消縄文と胴部に帯縄文をもつ。2692 は帯縄文の間に磨

消縄文帯をもつ深鉢。2693は台付鉢の台裾部。

3類 なし。

4類 (2694) 列点文をもつ類。頸部が屈曲する鉢。外面口縁とくびれ部に1列の列点沈線帯を加える。口縁端部に貼り瘤をもち、内面はそれをつなぐ1列の列点沈線帯が弧状に加えられる。

5類 (2696～2701・2703) 紐線文の系統を引いた砲弾形の深鉢。2697～2701・2703は、上部に横方向の弧状条線を、過半は斜めの条線をつける。2696は口縁に段をもち、体部に条線をもつ。

6類 (2706～2708・2710・2711) 無文土器。2706のような頸部のくびれる鉢、2707・2710のような口縁が折り返し状になり、器面調整が粗い鉢、2708のような壺などバリエーションが豊富である。

7類 (2691) 羊歯状文をもつ壺。

1類は1期の安行3a式。2・4～6類は2期の安行3b式ないし姥山Ⅱ式だが、6類は前後の時期のものを含むであろう。7類は2期の大洞B-C式。

第Ⅸ群土器 (2704・2705)

3類 (2704・2705・2717) 太い沈線により区画された磨消縄文をもつ土器。2704は鉢。内面にも太い沈線文を描く。2705は口縁にレンズ状の磨消縄文をもつ砲弾形の深鉢。2期の前浦Ⅱ式。

第Ⅹ群土器 (2709・2712～2758・2758)

2類 (2712) 隆線により工字文を描く壺。隆線ははっきりしており、文様も整っている。

3・4類 なし。

5類 (2713～2716) 沈線文を描く土器。2713は頸部に3条の沈線により稲妻状の文様が描かれる。2714は2条の直線による菱形文で構成される。2715は文様帯の下に細密条痕がみえる。2716は口縁が内湾する鉢で、口縁部沈線の下に三角形の沈線を描き、その中を列点で埋める。

7類 (2718～2733・2758) 撚糸文の深鉢。

2718は肥厚した口縁に横方向の撚糸文を施し、頸部を無文とするd種。2719は単純な口縁で、一面が横方向の撚糸文。2720・2721も頸部が無文である。2733は節が明瞭でなく、撚糸を引きずって条痕のようにしている。2758は底部。端部のはみ出しが著しい。

8類 (2709・2734～2752) 条痕の深鉢。2736・2739のように細く密で整ったものが多い。2735は口縁が肥厚し、横に細密条痕が施される。2734は波状口縁。2709は口頸部が幅広い無文帯となる深鉢。口縁端部に押捺が施され、外面に粘土が押し出されている。2736は肩部にボタン状の突起がつけられ、左右に沈線文を1条引く。2741・2748などはあらい条痕である。2749～2752は貝殻条痕である。

2類は大洞A1式。7類は千網式。5・8類は荒海式。荒海式は2式を主体とする。

21 G区出土土器のまとめ 21G区出土土器は、縄文後期前半～晩期終末。千網式・荒海式を主体とするが、堀之内1式、姥山Ⅱ式なども一定量存在している。

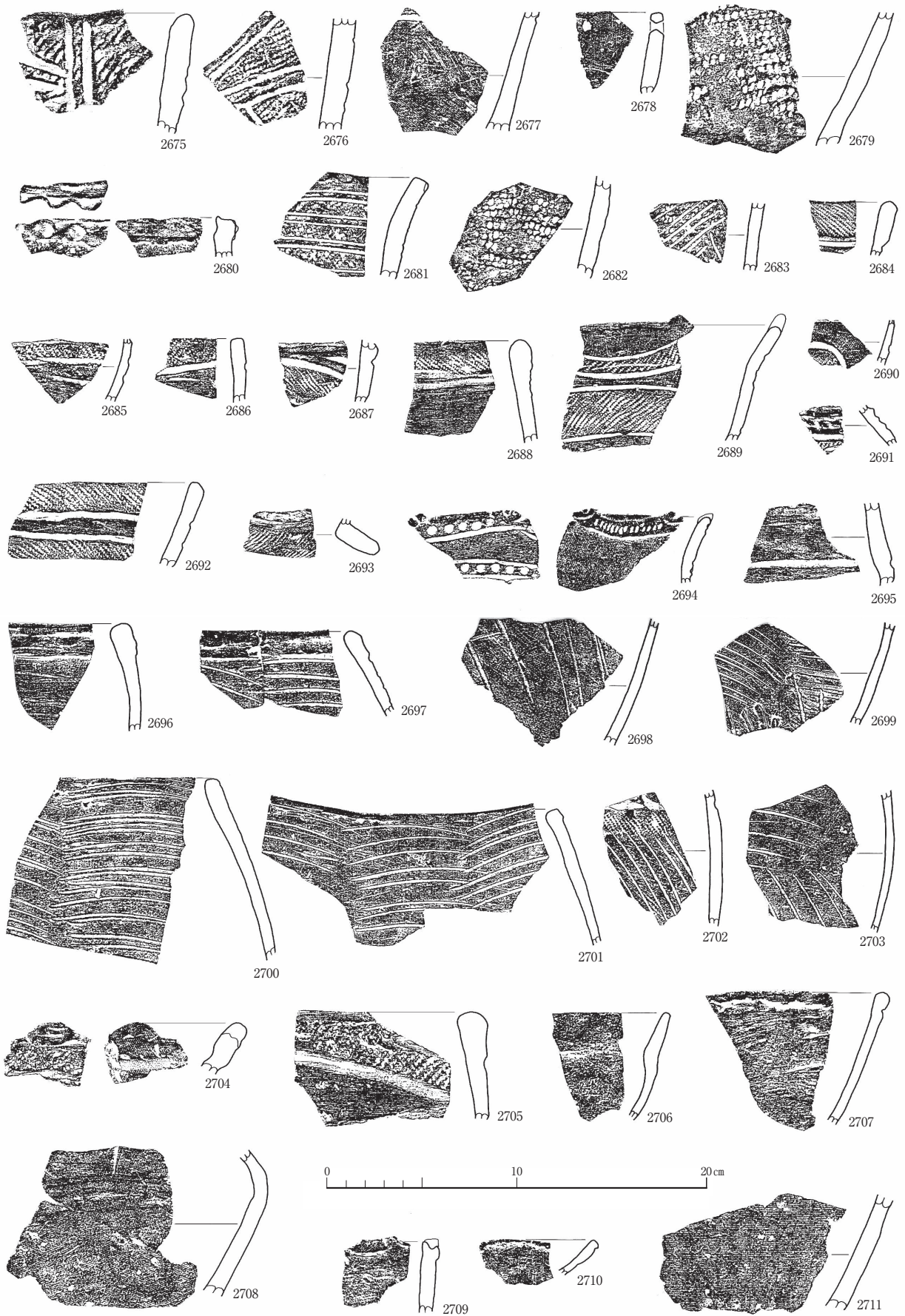


図 164 東西トレンチ 21 G 区出土土器 (1)

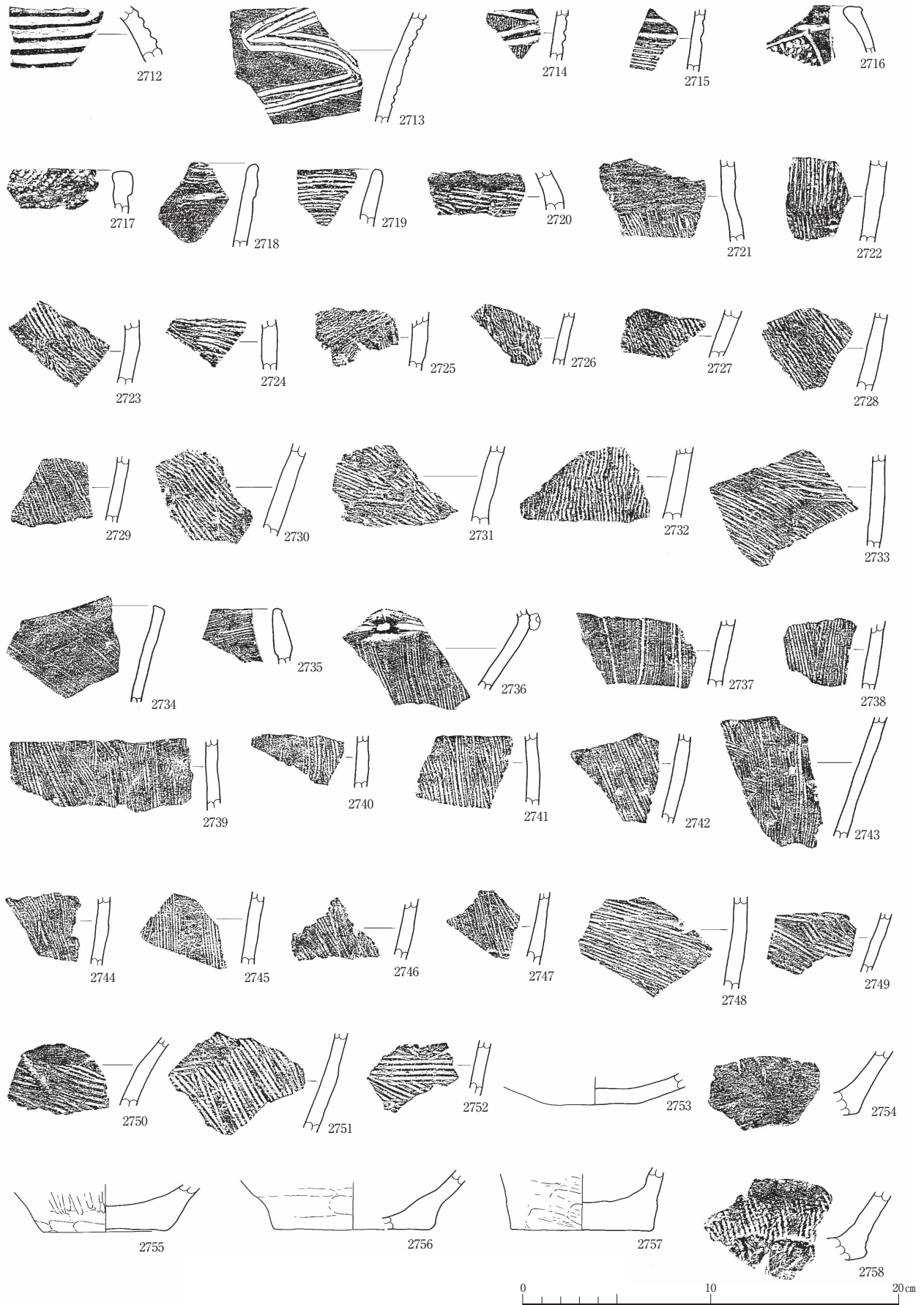


図 165 東西トレンチ 21 G 区出土土器 (2)

表38 東西トレンチ21G区出土土器の層位

番号	層位	2691		2708	?	2725	耕作土	2742	表土層
2675	?	2692	?	2709	第1層	2726	第1層②	2743	耕作土
2676	第1層	2693	2層	2710		2727	?	2744	第1層②
2677	?	2694	2層	2711	?	2728	耕作土	2745	貝層上面
2678	?	2695	?	2712	?	2729	耕作土	2746	第1層①
2679	?	2696	?	2713	貝層上面	2730	耕作土	2747	貝層上面
2680	第1層	2697	?	2714	2層	2731	第1層	2748	貝層上面
2681	第1層	2698	?	2715	第1層	2732	第1層②	2749	第1層②
2682	第1層	2699	?	2716	表土層	2733	貝層上面	2750	第1層
2683	貝層上面	2700	?	2717	第1層	2734	貝層上面	2751	貝層上面
2684	2層	2701	?	2718	貝層上面	2735	第1層②	2752	耕作土
2685	貝層上面	2702	?	2719	第1層②	2736	貝層上面	2753	2層
2686	第1層	2703	?	2720	耕作土	2737	第1層②	2754	第1層
2687	第1層	2704	第1層	2721	貝層上面	2738	第1層②	2755	?
2688	?	2705	第1層	2722	第1層	2739	貝層上面	2756	?
2689	第1層	2706	?	2723	第1層②	2740	耕作土	2757	耕作土
2690		2707	?	2724	?	2741	貝層上面	2758	耕作土

4 22G区の調査と出土土器

(1) 土層堆積状況 (図166)

貝層は1・2層の下に堆積している。c区の南西半に薄く堆積している。貝層表面の海拔標高は30.2mほどである。厚みはわからないが、南壁寄りに貝層が抜けていたり、d区にまで貝層が続いていかないうところからすると、せいぜい10cmほどであろう。遺構は確認されていない。

(2) 遺物の出土状況と堆積の時期 (図166)

貝層とほぼ同一レベルの2層に、まんべんなく土器や獣骨が散在している。晩期前半の土器をまじえ、千網式・荒海式が主体をなす。



図 166 東西トレンチ 22 G 区

(3) 土器 (図 167 - 2759～2815)

第Ⅱ群土器 (2759) 縄文を施し、鐙状の隆起がめぐる深鉢。繊維を含む。黒浜式。

第Ⅵ群土器 (2760～2765)

13 類 (2762) 縄文だけ施文される単純な口縁の深鉢。口縁内面に沈線を設ける。

14 類 (2763・2764) 紐線文土器。2764 は 2 条の紐線は細く押捺も小さく、条線が細いのに対して、2763 は条線が粗い。

2762・2764 は加曽利 B1 式、2763 は加曽利 B2 式。

第Ⅶ群土器 (2766・2767・2788)

2 類 (2767) 口縁に縄文を施し、2 条の沈線をめぐらす。

3 類 (2788) 隆起帯縄文の深鉢。

4 類 なし。

5 類 (2766) 紐線文土器。

2 類は曾谷式、3・5 類は安行 1 式。

第Ⅷ群土器 (2768・2770～2784)

1 類 (2768) 帯縄文をもつ。細く隆起の度合いは低い。

2 類 (2770～2772) 扁平な磨消縄文の土器。三叉文をもたない。2770 は口縁が屈曲外反し、幅広い縄文帯をもつ。

3類 なし。

4類 (2777・2779～2782) 列点文をもつ土器。2777は波状口縁の深鉢。口縁に沿って2条の沈線により波頂部に菱形区の区画を設けその中に円形の沈線文を2つ加える。2779～2782は、口縁に沈線文を施し、その中に列点文を入れる。列点文は1段と2段があり、2段の2782は米粒状をなす。

5類 (2774・2775) 紐線文土器の流れをくんだ深鉢。紐線文を欠き弧状の条施文を入れた砲弾形の深鉢。

6類 (2783・2784) 無文土器。2784は口縁に粘土はみ出しをもつ。

7類 (2773・2778) 大洞系土器。2773は連珠文と磨消縄文をもつ。2778は入り組み磨消縄文をもつ。

1類は1期の安行3a式。2・4・5類は2期の安行3b式ないし姥山Ⅱ式。7類は2期の大洞B-C式。

第Ⅸ群土器 (2786・2787)

3類 太い沈線により区画された磨消縄文をもつ。

前浦Ⅱ式。

第Ⅹ群土器 (2785・2790～2815)

3類 (2791・2793) 浮線網状文の鉢。長いレンズ状の口縁外帯をもち、体部に太い浮線によりハンガー状の浮線網状文を描く。口縁外帯と体部文様の間に狭い無文帯がある。2794は体部文様の下端に、3条の沈線をもつ。あるいは2類か。

4類 なし。

5類 (2792～2794) 沈線文の土器。2792は地文を細密条痕とし、変形工字文と2条以上の稲妻状沈線文をもつ。2794は1条の稲妻状沈線文をもつ。

6類 なし。

7類 (2795～2806) 撚糸文の深鉢。

d種) 2795～2800は口縁が有段で肥厚し、撚糸を横方向に施す。頸部は無文帯となる。2796は口縁端部に押捺がある。2798～2800は胴部。

8類 (2807～2811) 細密条痕の深鉢。2807は口縁に三角状の突起がある。口縁に横方向の細密条痕を施す。細密条痕はいずれも細かく密である。3・7類は千網式。5・8類は荒海式。

22G区出土土器のまとめ 22G区出土土器は、縄文後期中葉～晩期終末。千網式・荒海式が主体をなすが、加曽利B式や安行3b式、姥山Ⅱ式も一定量存在している。

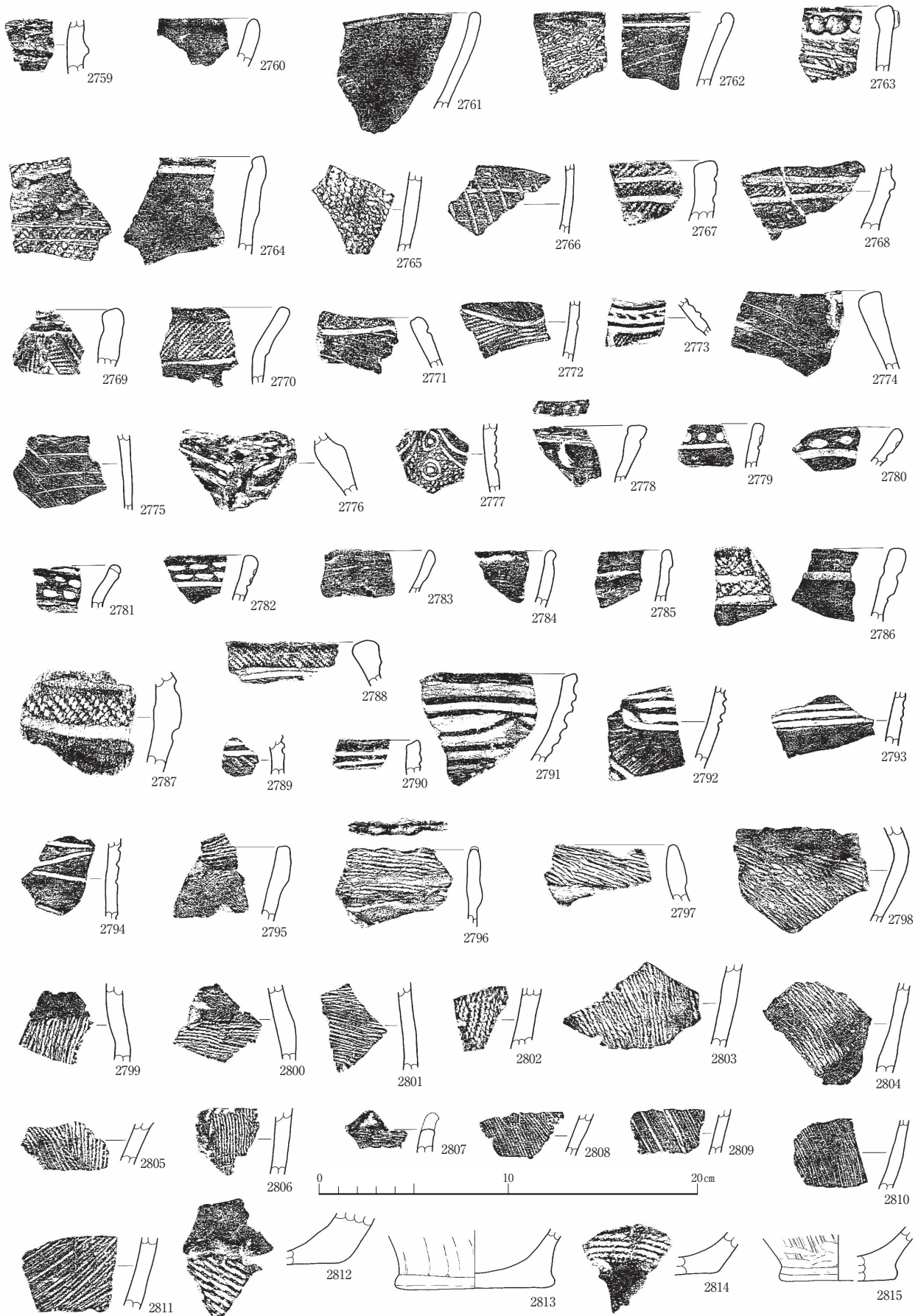


図 167 東西トレンチ 22 G 区出土土器

表 39 東西トレンチ 22 G 区出土土器の層位

番号	層位	2770	1 層	2782	1 層	2794	1 層	2806	1 層
2759	1 層	2771	1 層	2783	?	2795	1 層	2807	2 層
2760	2 層	2772	1 層	2784	1 層	2796	1 層	2808	1 層
2761	?	2773	1 層	2785	1 層	2797	1 層	2809	1 層
2762	1 層	2774	1 層	2786	1 層	2798	1 層	2810	1 層
2763	?	2775	?	2787	?	2799	1 層	2811	1 層
2764	?	2776	1 層	2788	1 層	2800	1 層	2812	1 層
2765	?	2777	1 層	2789	1 層	2801	1 層	2813	1 層
2766	1 層	2778	2 層	2790	1 層	2802	1 層	2814	?
2767	?	2779	1 層	2791	?	2803	1 層	2815	1 層
2768	?	2780	1 層	2792	?	2804	?		
2769	?	2781	1 層	2793	?	2805	1 層		

5 21 G・23 G・24 G・23 H・26 I 区の調査と出土土器および土製品

(1) 土層堆積状況 (図 168)

22G に見られなかった混土貝層が、再び現れる。23G の d 区から 24G の c 区に及んでおり、貝層上面の海拔標高はおよそ 31m である。遺構は確認されてない。

23G 区南壁にかかって、早稲田大学のものと思われるトレンチの跡が捉えられた。それは、位置からして N トレンチの北東端と考えられた。トレンチの幅などを明確にすべく、23Ha 区の南半分にはトレンチを入れたところ、幅 2m のトレンチであることが判明し、早稲田大学のトレンチの幅と一致した。また、東壁際には平面 1×1m ほどの深掘りが確認された。

深掘り痕を再発掘したが、地表面から深さ 260cm に及んでおり、ローム層まで掘りぬいていた。土層は大きく 4 層に区分され、上から貝層の 2b 層、黒褐色土の 2c 層、褐色土の 3a～3c 層、黒褐色土の 4 層、暗褐色～褐色土の 5a・5b 層である。貝層の 2b 層は厚さ 10cm ほどで、上部が破碎貝層である。3 層、4 層は J トレンチの 4 層、5 層に対応し、3 層と 4 層の境界付近から土器が出土している点も類似している。5a 層はローム漸移層で、5b 層はローム層である。ローム層の海拔標高は約 29.0m である。J 区のハードローム層よりも 40cm ほど高いが、その上の堆積状況と合わせると谷を埋める同じような堆積が広がっていることが推測できる。早稲田大学 F トレンチも同じような堆積状況を示している。

各層からプラント・オパール分析用の土壌サンプリングをおこなった。

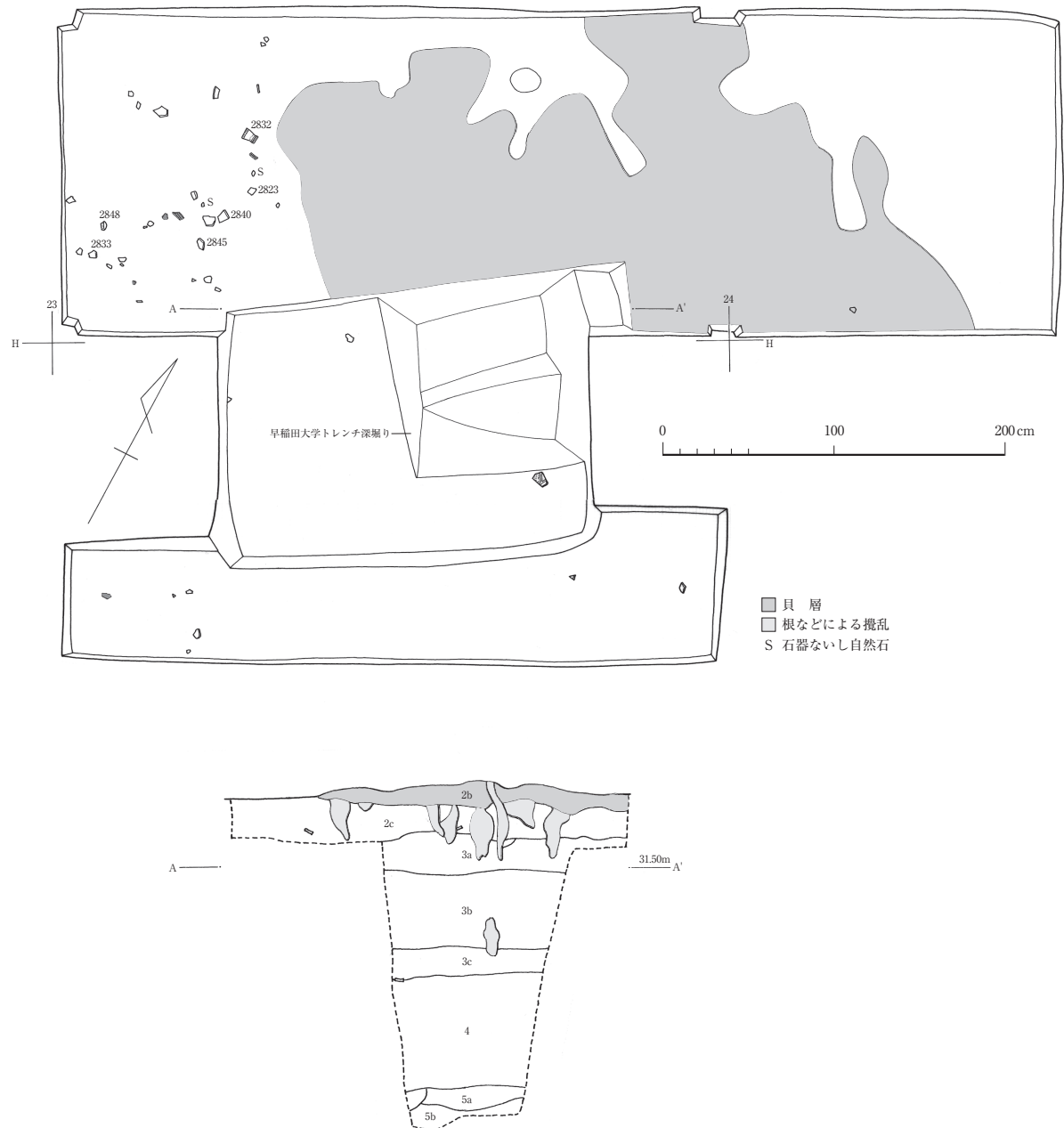


図 168 東西トレンチ 23 G・24 G・23 H 区

(2) 遺物出土状況と堆積の時期 (図 168)

貝層の東側 2 層から土器が散漫に出土した。千網式を主体としているので、貝層もその時期であろう。深掘りの 4 層上面から出土した土器の型式は堀之内 1 式と思われる。

表40 東西トレンチ21G・23G・24G・26I区出土土器・土製品の層位

23G区

番号	層位	番号	層位	番号	層位	番号	層位	番号	層位
2816	1層	2823	?	2830	2層	2837	1層	2844	2層
2817	?	2834	2層	2831	2層	2838	1層	2845	?
2818	2層	2825	1層	2832	?	2839	2層	2846	1層上面
2819	?	2826	2層	2833	2層	2840	?	2847	1層
2820	?	2827	2層	2834	1層	2841	1層	2848	?
2821	1層	2828	1層	2835	1層	2842	1層	2854	2c層
2822	3c層-4層	2829	1層	2836	1層	2843	?		

24G区

番号	層位	番号	層位	番号	層位	番号	層位	番号	層位
2849	不明	2855	2層	2860	2層	2865	1層	2870	2層
2850	1層	2856	2層	2861	2層	2866	1層	2871	2層
2851	1層	2857	2層	2862	2層	2867	1層	2872	1層
2852	2層	2858	2層	2863	2層	2868	1層	2873	2層
2853	2層	2859	1層	2864	不明	2869	1層	2874	2層

26I区

番号	層位	番号	層位	番号	層位	番号	層位	番号	層位
2875	3層	2877	2層	2878	3層	2879	3層	2880	2層
2876	2c層								

土製品

番号	層位	番号	層位	番号	層位	番号	層位	番号	層位
2881 (21G区)	耕作土	2882 (23G区)	1層	2883 (23G区)	1層	2884 (26I区)	1層		

(3) 土器 (図169-2816~図170-2874)・土製品 (図170-2882・2883)

第Ⅴ群土器 (2816) 沈線文のある深鉢。堀之内Ⅰ式。

第Ⅵ群土器 (2817・2819・2820・2849・2850) 2817は磨消縄文のある深鉢。2820・2850は縄文地に条線がある紐線文土器。これらは加曽利B2式。

第Ⅶ群土器 (2824・2851・2852) 隆起帯縄文の深鉢。安行Ⅰ式。

第Ⅷ群土器 (2821・2823・2853~2855) 2821は扁平な帯縄文の土器。2853は条線のみをもつ砲弾形の深鉢である5類b種。2853・2855は同じく砲弾形をした深鉢で、口縁の一条の沈線をもつ。2854には列点を加えられている。安行3b式あるいは姥山Ⅱ式。

第Ⅸ群土器 (2824・2825・2856・2857) 太い沈線で区画した深鉢。前浦Ⅱ式。

第Ⅹ群土器 (2826~2847・2858~2874)

2類 (2826・2827・2860) 2826は肩部に工字状の文様をもち、体部に撚糸文をもつ。2827は多条の沈線を口縁にめぐらした深鉢。沈線は6条以上に及ぶ。2860は壺である。頸部に一条沈線がめぐり、胴部はよく磨かれて平滑である。

3類 (2858) 浮線網状文の鉢。2分岐浮線文が頸部にめぐる。

4・5類 なし。

6類 (2867) 胴部に多条の沈線をもつ細密条痕の深鉢。

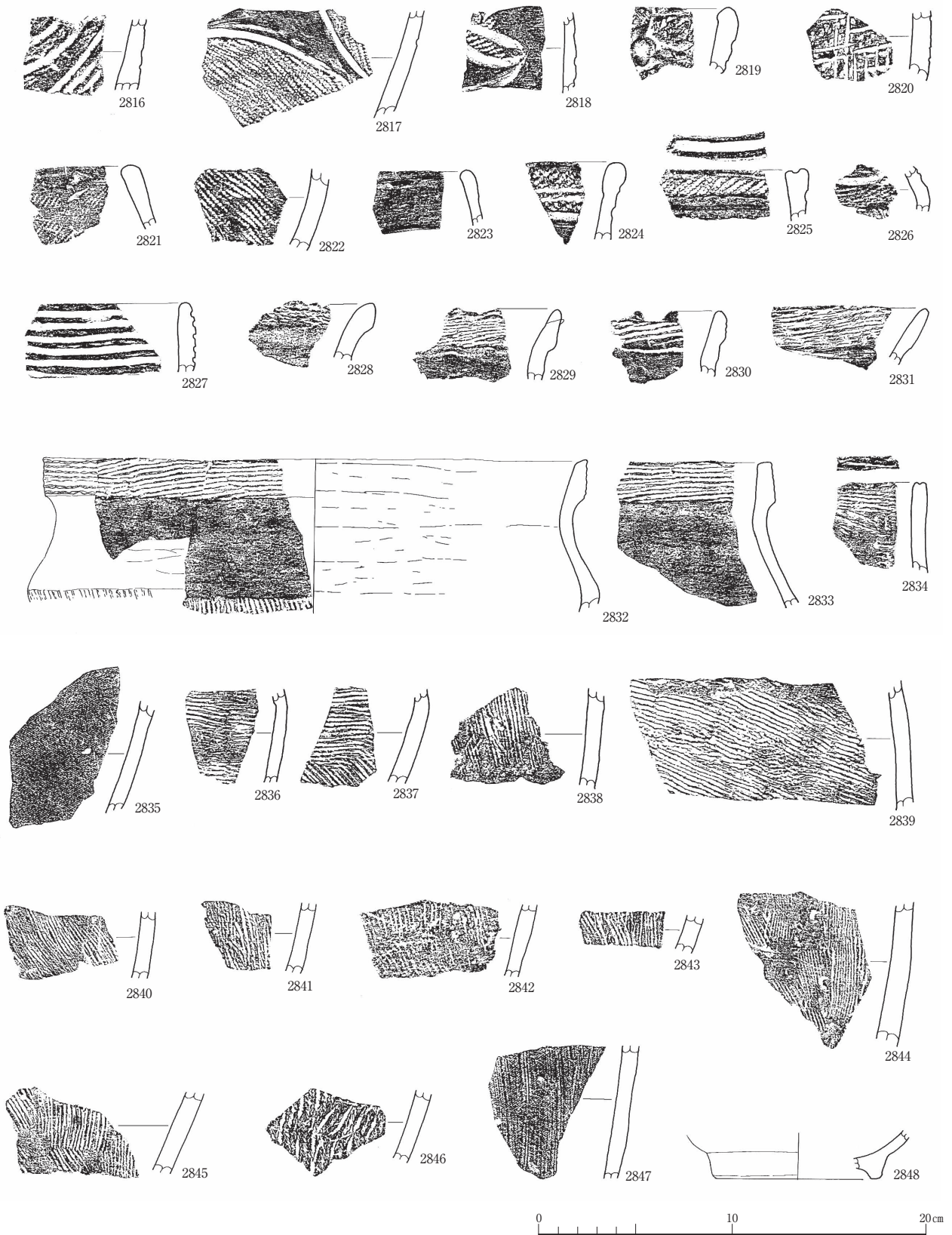


図 169 東西トレンチ 23 G 区出土土器

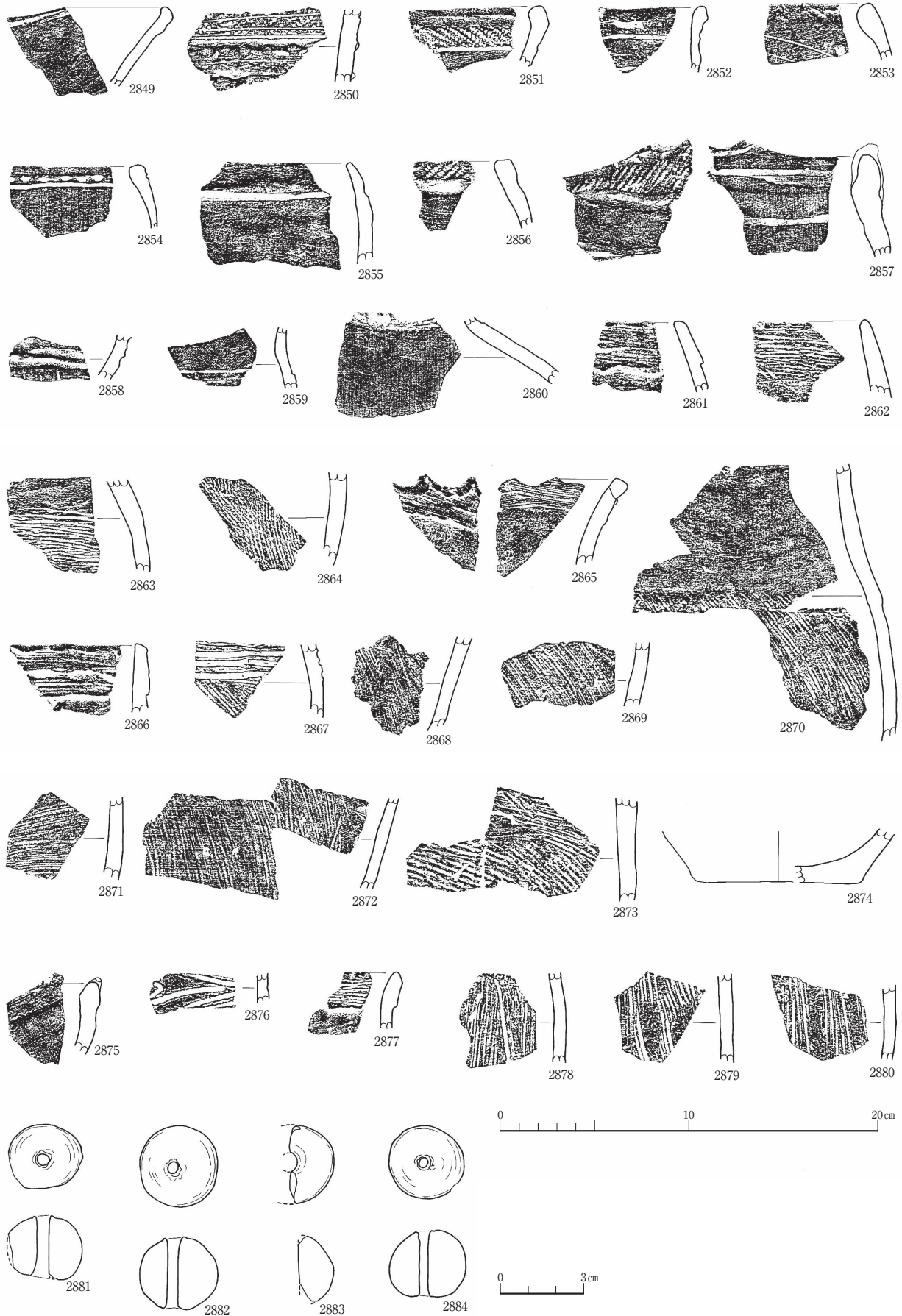


図 170 東西トレンチ 24 G・26 I 区出土土器, 21 G・23 G・26 I 区出土土製品

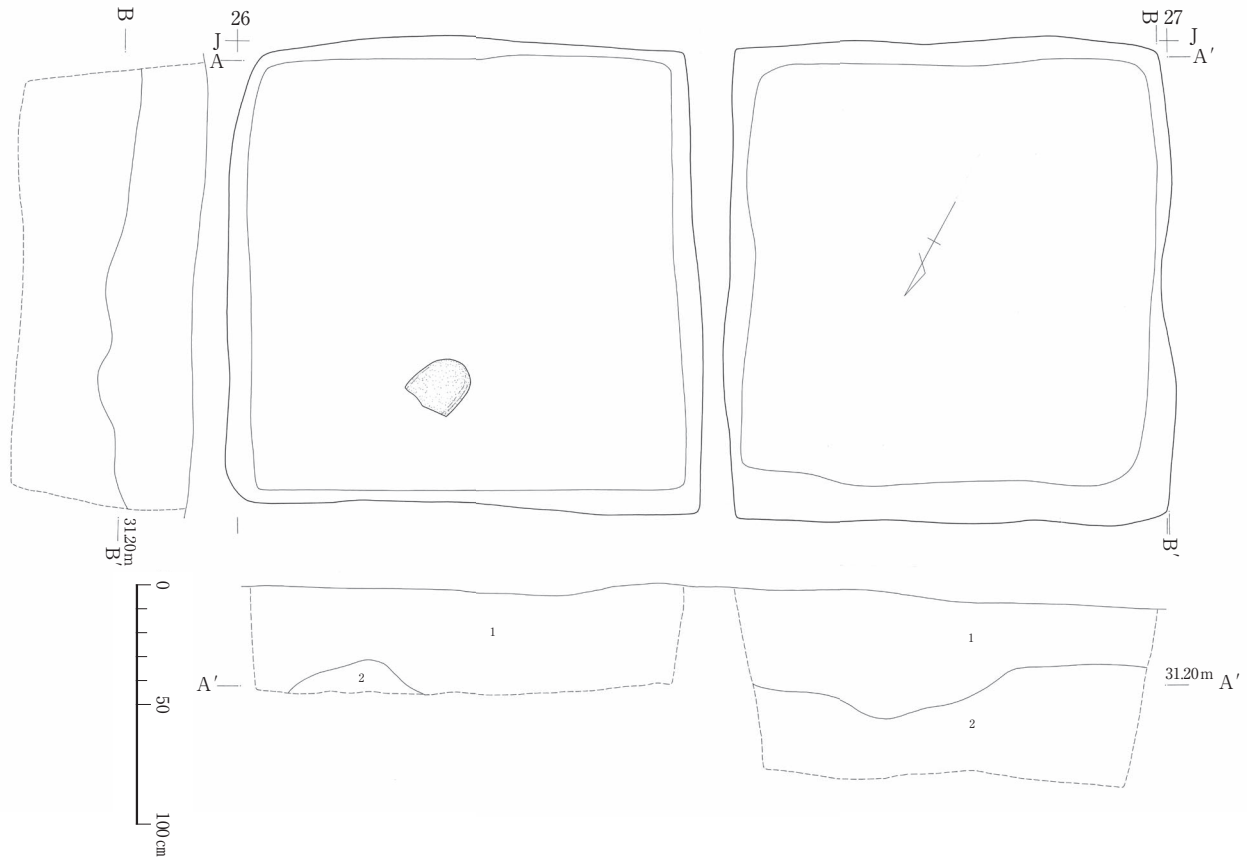


図 171 東西トレンチ 26 I 区

7 類 (2828～2839・2861～2864) 撚糸文の深鉢。2828～2834 は折り返し口縁で、肥厚した口縁に横方向の撚糸文を施す。2830 の口縁端部には 2 個一対の突起が、2829 の口縁端部には押捺がみられる。これらは 2832 のように、頸部が無文であり肩部で屈曲し、胴部に縦方向の撚糸をもつであろう。2832・2833 は段が鋭く、屈曲部の突出も大きく、撚糸も深くシャープである。2861 は折り返し口縁の砲弾形深鉢で、折り返し部に横方向の撚糸文がある。2863 は頸部に無文帯をもち、胴部に撚糸文が加えられる。撚糸文は横方向である。

8 類 (2840～2847・2865・2866・2868～2873) 細密条痕の深鉢。細密条痕は細く密で整ったものが多い。2846 は粗い。2865・2866・2877 は折り返し口縁で、頸部に無文帯をもつ。2865 の口縁端部は波状をなし、それにとまなう粘土はみ出しが表面に認められる。口縁内面にも細密条痕が施される。2878～2880 は条痕の太さがまちまちである。2873 は二枚貝腹縁によると思われる。

2 類は大洞 A 式の影響を受けた在地の類型で、7 類はその時期ないし前浦Ⅱ式の粗製土器。2832 などが古いものであろう。5 類は荒海式で、8・9 類はその時期の粗製土器と半精製土器である。

2882・2883 は 23G 区から出土した古墳時代の土玉である。

23G・24G 区出土土器のまとめ 23G・24G 区出土土器は、後期前半～晩期終末であり、大洞 A 式並行と荒海式土器が主体をなす。

(設楽)

6 石器・石製品 (図 172)

41 は、白色の頁岩製、無茎凹基式の石鏃である。

42 は、角岩の剥片。

43 は、硬質頁岩の貝殻状剥片。

44 は、定角式石斧の基部の小破片で、精製品である。この個所では幅と厚さが等しい。石材の緑色岩のもっとも近い産地は埼玉・群馬県境付近である。

45 は、扁平な細長い砂岩礫の長辺から先端にかけて敲き痕をもつ敲石である。砂岩製。

46 は、焼けてはじけて小破片になった砥石である。平坦面と側面に研磨面をもつ。石材の角閃石安山岩のもっとも近い産地は鬼怒川流域である。

47 は、薄く長い長方形の板状で両面・両側面を研磨面をもつ手持ちの砥石(?)である。砂岩製。

48 は、砥石の小破片である。a 面が砥面である。欠損部に円形の穴の半分が残っている。砂岩製。

49 は、石皿の半欠である。扁平な自然礫をそのまま利用。平坦な b 面をもっぱら使っている。17.8cm × 復元径 22cm。砂岩製。

50 は、石皿が磨面にたいして直角方向に薄く割れた小破片である。1 辺に磨面がのこっている。

51 は、円礫を利用した小型の敲石である。側面の 2 辺に敲いて割れた面をもつ。小型石器を製作するためのハンマーであろう。

52 は、小玉である。滑石製。

53 は、小玉である。滑石製。

(春成)

表 41 東西トレンチ出土石器・石製品一覧

番号	種類	出土地点	計測値 (cm)	石質	備考
41	石鏃	26I 区 c 2 層	2.4×1.5×0.4	頁岩	
42	剥片	22G 区 c S-1	3.3×1.9×1.0	角岩	
43	剥片	26I 区 c 2 層 S 1	1.8×2.0×0.7	頁岩	
44	磨製石斧	22G 区 cd 1 層	3.0×2.6×2.8	緑色岩	定角式の基部小片
45	敲石	21G 区 d 耕作土 1 層	10.6×3.9×1.8	砂岩	底辺に打痕
46	砥石	22G 区 cd 1 層	6.3×5.8×0.5	角閃石 安山岩	反対面は剥離
47	砥石?	21G 区 d 耕作土 1 層	6.9×4.2×1.4	砂岩	
48	砥石	20G 区 c 東耕作土	4.4×3.5×1.4	砂岩	
49	石皿	26I 区 d 破碎貝層 S-1	17.8×15.8×5.1	砂岩	半欠
50	石皿	21G 区 d 耕作土 1 層	5.9×7.5×1.8	砂岩	小破片
51	敲石	28H 区 a 1 層	5.5×4.0×3.0	砂岩	
52	小玉	A 地点北側畑	1.2×1.1×0.5	滑石	
53	小玉	26I 区 c 20 層	1.1×1.0×0.5	滑石	

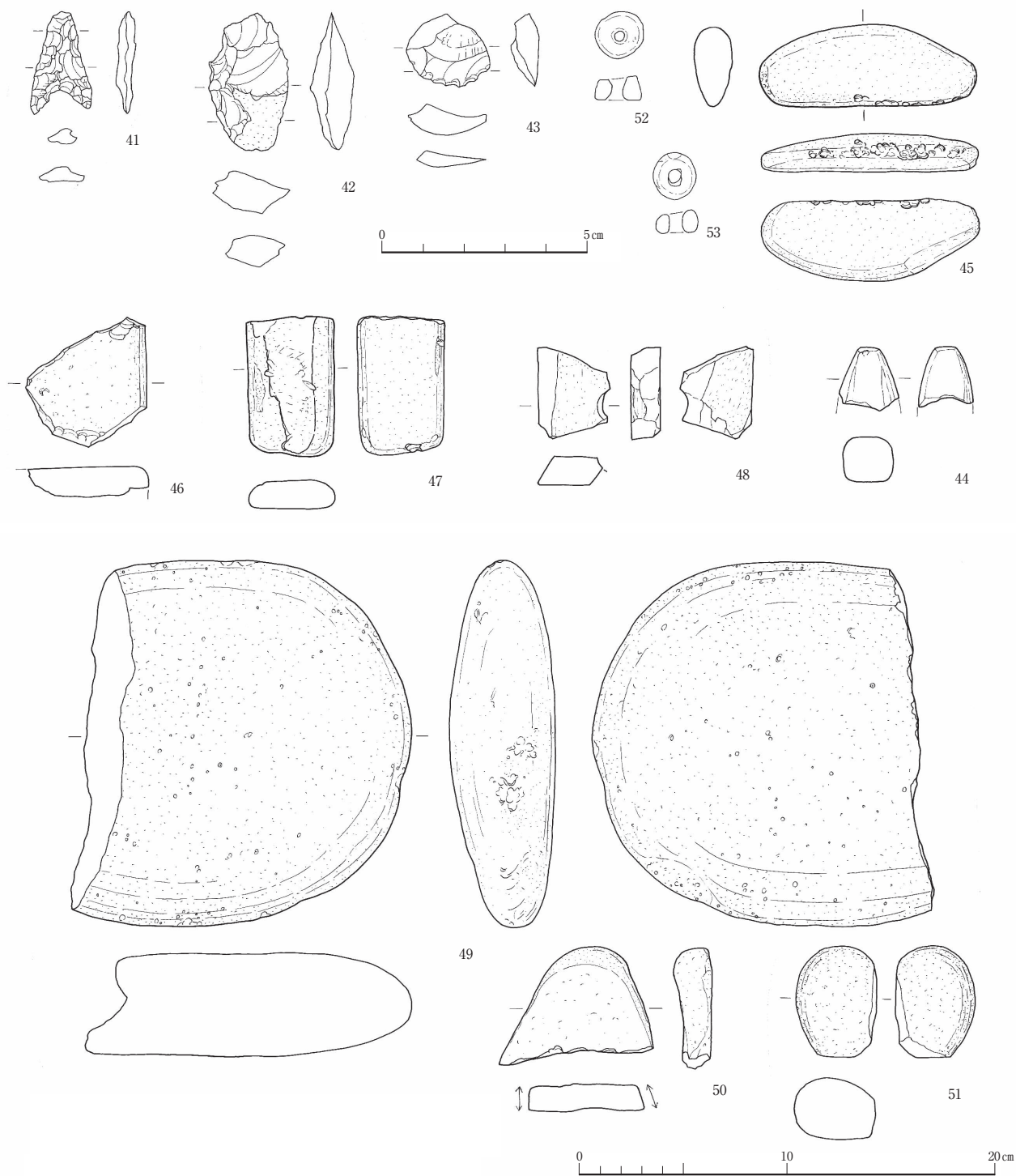


図 172 東西トレンチ出土石器・石製品

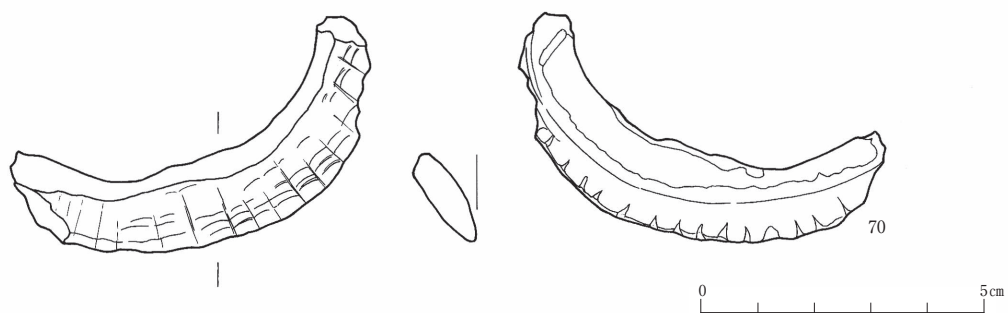


図 173 東西トレンチ出土貝製品

7 貝製品

貝輪の未成品が1点, 21G-C区貝層上面から出土した。ベンケイガイ製で, 腹縁を使用している。
最大長は6.6cm, 高さ1.65cmである。

(設楽)

表 42 東西トレンチ出土貝製品一覧

番号	種類	出土地点	種	最大長 (cm)
70	貝輪未成品 (腹縁)	21G-C 貝層上面	ベンケイガイ	6.6